

第5回 十和地域まちづくり推進協議会 会議録要旨

【日 時】 令和4年8月23日（火）午後7時00分～9時00分

【出席者】 中平光高委員、伊賀守委員、田頭誠志委員、鈴木幸代委員、村井洋平委員、栗原あゆみ委員
（欠席：松下敦委員、森正和委員、松下洋平委員、中平良子委員）

【行政側】 富田地域振興局長、畦地町民生活課長、大元政策監、大河原文化的施設整備推進室長、
吉川町民生活課副課長、上川地域振興課副課長、都築地域振興課係長、萩原町民生活課主査、
西尾文化的施設整備推進室次長、松下文化的施設整備推進室主任、西内地域振興課主任

【傍聴人】 0名

【議事及び質疑応答】

1. 開会

2. あいさつ

富田十和地域振興局長

議事の前に・・・

職員と推進委員も交えたワークショップ形式の協議の場を設ける

3. 議事

（1）文化的施設（図書館）十和分館について

（田頭誠志会長）

前回の協議では、十和地域に文化的施設は必要であると決議された。今回は先ほど行ったワークショップも含め、皆さんの意見を聞きたい。ただ、いきなり意見をというのは難しいかと思うので、配布された資料を参考に進めていく。

まず、図書館の中でのコミュニティスペースについて何か意見はないか。空間的なことでも構わないし、ソフト面のことで構わないのでお願いしたい。…もう少し広くとらえるなら図書館機能というところかと思うが、何かないか。

（村井洋平委員）

自分は西土佐の図書館の方で体験型のワークショップを開いたりしているのだが、西土佐の図書館はスペースがほとんどない。そのため、このような会議室を使って作業をしたりしているが、清掃等もなかなか大変である。なので、技術室みたいなスペースができるとありがたい。

（田頭誠志会長）

文化的施設の計画の中でそういったものはあったりしないのか。

（大河原室長）

基本計画の段階では、「ものづくりラボ」というようなスペースの検討をしていたが、実施設計に割振り当てはめていったとき、専用ができる場所まではできず、他の活動も含めて多目的室という形で落とし込むようにした。

（田頭誠志会長）

四万十市の図書館が主催をして、他団体を呼んで開いているということか。

（村井洋平委員）

TRC 社が委託を受けて行っている。

(田頭誠志会長)

STEAM 教育の側面もあるのではないかな。文化的施設が進めようとしている姿というのは…。

(西尾次長)

STEAM 教育というのは、おっしゃる通り文化的施設内にあり活用するスペースの計画を進めていたが、町内にそういった教育を行える場所が別に用意することができるのであれば、文化的施設とその施設での分散を図っている。そうすることで、文化的施設だからこそできるサービスとして提供できるものを設置し、町内に広くサービスを展開できるように計画している。

また実際に、歌を歌いたいとかダンスをやりたいとかいろいろと意見があったが、そういったことであれば町内の四万十会館とかで可能かと思うので、文化的施設だからこそできることにフォーカスを当てて計画している。

(田頭誠志会長)

そういった形で四万十町も進んでいってるとのことだが、四万十市でもそういった動きをしているということか。

(村井洋平委員)

その一環ではあると思う。

(田頭誠志会長)

十和分館(仮)という名目ですが、何か意見はないか。

(栗原あゆみ委員)

私が以前訪問した図書館では、蔵書数は少ないが、外国の本を多く取り扱っていた。面白いと思ったのは、本の表紙を見せる置き方で棚に置き、思わず手に取ってしまうような魅力的な配置がされていた。知らない本に手を出すきっかけ作りとして良い一つの手だと感じた。アートの面で言うと、デジタルアートみたいなモニターを使って楽しむような作りだった。そういったモニターなどを操作できるパソコンをいろんな用途で使うことができればいいと思う。

(田頭誠志会長)

今計画されている文化的施設でもデジタルを使った、例えばデジタルアーカイブ公開システムとはイメージは違うのか。

(大河原室長)

デジタルアーカイブの方はストックされたものを公開するというイメージが強いので、リアルタイムで見えていくことと少し違うように感じる。

(田頭誠志会長)

栗原委員が最初に言った蔵書に件について。本の置き方だが、表紙を見せるように配置していたとのことだが…。

(栗原あゆみ委員)

はい。実際にそのように配置すると、視覚情報としてかなりインパクトがあるものとなり、思わず手に取りたくなってしまう。

(田頭誠志会長)

ただ、その代わり見られる蔵書数は少なくなるとのこと。

配布している資料に十和分館の蔵書希望は 12,000 冊と書かれているが、四万十町の図書館蔵書数が大正分館と合わせて 71,000 冊である。希望の内容としては古い本などは検討しておらず、新しい蔵書だけを考えている。ちなみに、現在公開されている元年度末の学校の蔵書数は、昭和小が 10,206 冊、十川中が 19,522 冊という数値となっている。十和分館の蔵書数は昭和小より少し多いくらいで 12,000 冊というイメージである。

(大河原室長)

一般的に年間日本で出版されているのが、タイトル数がだいたい 70,000 冊前後。多量に出版されて、少量ずつ配置するといった感じ。実際にそこに何冊あるかというのと同時に、それをいつ改訂していくか。後、10 年の単位で 10,000 冊が対象になった時に、文化的施設の立ち位置として言うと、本館、分館を合わせた蔵書が四万十町全体の蔵書数となるため、どこかでストックして、全体に巡回させていく流れになると思う。

(田頭誠志会長)

また、新規だけでなく、委員からも意見もあった知識なども得られる場所として進めていくためにも、蔵書あるいは選書といったストックを上手く巡回できるようにするのも大きな意味をなしていくと思う。ただ、単に数字の問題だけでなく、見せ方を変えたりするだけでも、今まで興味を示さなかったものにも興味を持てるようになるかもしれない。

他に意見はないか。

(村井洋平委員)

窪川にできたコワーキングスペースに行ってみて思ったが、あのようなものが分館にもできたらと思う。パソコンを持って行って、作業や勉強したりできるスペース。要するにネット環境もあり、過ごしやすい空間を用意できれば、外から来た人も使いやすい図書館になるのではないかな。

(田頭誠志会長)

そういった作業ができ、かつ学びができるようなスペースがあればということ。

意見も止まって来ているので、事務局の方から資料の説明をお願いしたい。

※事務局より資料を使った説明

(田頭誠志会長)

事務局より、図書館の分館について改めて説明をいただいた。今の説明を踏まえた上で質問などはないか。

(伊賀守委員)

大正分館も今動きがあるとのことだが、実際利用者は多いのか。

(大河原室長)

貸し出しの冊数で言うと、年間で 12,000 冊ぐらいの貸し出しがあるのでかなりの利用ではないかと思う。

(栗原あゆみ委員)

十和地域には図書館が無い分館を作るという流れだが、大正分館に関しては何か手を入れたりはしないのか。例えば、コミュニティスペースといったものが無いので増設するといったものはないのか。

(大河原室長)

皆様ご存じのとおり、大正分館は大正地域振興局の会議室を使わせていただいている。文化的施設の完成によって、本館の強化に連動して分館でも変化はあるかと思うが、施設としての変更を検討していない。

(田頭誠志会長)

本題に戻るが、図書館十和分館、以後十和分館と呼ぶが、十和分館のことについて改めて質問や意見はないか。

(松下主任)

地域史料の収集や保存についてだが、その地域の文化の記録を残していくことが大切。自分が地域おこし協力隊の時に大道の昔野菜や味噌漬けのような記録として残していきにくい物も、地域史料と

して形にしていけたらよいのではないかと思います。

(田頭誠志会長)

地域の方との協力が必要だが、それを担うのが図書館職員ということか。

(松下主任)

それを役場の職員がやるというのおかしいと思う。

(田頭誠志会長)

今、大道の話も出てきたが、実際に地域の伝統というのはちょっとずつ薄れてきているのか。

(伊賀守委員)

十和でも大道みたいな小さな集落でもそういった伝統はまだ残っている。今のところはだが。例えば、花飛びみたいなものは同じ伝統のものとして記録するか、それとも集落ごとに違いもあるのでそれぞれで記録していくか。そういった面でも変わってくるかと思う。

(田頭誠志会長)

そういった記録などやってくれる職員を雇えたらありがたい。
ちなみに大正分館で雇っている常駐の方は何人か。

(大河原室長)

現在、3人雇っている。

(田頭誠志会長)

実際、そういった常駐の方々が先ほど言った地域史料の収集や保存ができるかどうか。

(大河原室長)

事務官の方々が現地に出て収集などができるならいいが、なかなか常駐職員だけではその対応は難しいと思うので、一種のコーディネーターのような方がいて一緒につくる、そういった記録ストックしてまとめ公開するなど、その部分を担っていける方がいれば、そこに図書館職員がサポートしていくという形になるかと思う。

(田頭誠志会長)

資料にも書かれているが、「旧小鳩保育所や四万十公社、他団体との連携」と書かれているが、その中で四万十公社は四万十ケーブルテレビが運営している運営部隊で、今、四万十ケーブルテレビはアーカイブに力を入れていて、旧道を撮影したものを撮り貯めたりして放送したりしている。そういった団体とこの地域に取材にいつてほしいなどの連携の仕方、そういったコーディネートのやり方もあるのではないかと思います。

(松下主任)

昔野菜で言えば、現在地域の小学生が実際に栽培したりしていて、3、4年生が対象で、3年生の時に経験した生徒が下の子に教えるというような形が取れている。また、ボランティアで野菜ソムリエの方やJAの方が関わってくれている。こういった活動もやっているの、記録として残していけば一つの「伝統」という形になっていくのではないかと。

(上川副課長)

写真や動画での保存もできていて、ケーブルテレビも撮影をしてくれているので、1から10まで記録は取れてないにしても、形として残っている。旧十和村時代のものも残っていたりするので活用もしていけるのではないかと思います。

また、自分の地元の久保川の花飛びの記録も個人的に残してくれていたりするので、そういったものを確認すれば今でも踊れたりする。各地域でもそういった記録は残っているかと思う。

(大元政策監)

例えば、他の図書館の事例として、今言われていたような収集はしているのか。図書館はどちらかと言えば、作られたものをストックしていった、それを活用する部分で提供していくというイメージがあるが、保存という部分でそういった事例があったりするのか。

(大河原室長)

大阪の方での活動だが、地域のアーカイブを作ろうとしていたり、映像や写真を集めたりしている。博物館などがある地域は、そちらと連携して、分担して展示など行ったりしている。格好の良い呼び方をすると図書館というのは一種の地域の記録装置なので、個人の中で貯め切らないものを社会的な装置として図書館は貯めていく感じの有り様の模索はしている。これまでも紙や印刷されたものとかはストックしてきているので、今はデジタル面の記録物や動画なども入ってきているイメージだと思う。

(大元政策監)

例えば、花飛びとかで言うと四万十町の川奥の花飛びとかは県の指定文化財になっていたりして、そういうものによっては文化財の兼ね合いとかも出てくるのではないかな。図書館として積極的に関わったりするのか。

(大河原室長)

関わる場所もでてきたりしている。みんながみんなやっている訳ではないが、言われていたように人材の問題であったり、期日の問題であったり、データをストックする場所がなかったり、媒体が変わってしまって VHS で撮り貯めてしまって確認することが難しいであったり、そういった現実には直面しているところもある。

(田頭誠志会長)

話を聞く限り、この十和地区でそのような活動担う団体はないということ。例えば、新しい分館ができるのであれば、そういった活動を担う価値はあるだろうし、ある一定の制度が担っていないと、タイムカプセルみたいに資料をしっかりと集めてもそれがそのまま埋もれてしまって、誰の手にも触れない、見たい時にも見られないということで、これはあまり意味がない。そういったものを地域の方々に見せることによって伝承していくことができる。蔵書も同じことが言えると思うが、良い物用意してもそれが活用されなければ意味がない。そういう運営を十和分館には求めていきたい。

(村井洋平委員)

質問だが、図書館の文化的施設本館が整備されるが、そちらは美術館や博物館と一緒にあったりするが、十和分館ではこういった形になっていくのか改めて理解したい。

(田頭誠志会長)

資料にも書かれていた地域史料の収集や保存のところにかかっていくかと思うが、文化的施設と言っても、現在の計画で挙げられている STEAM 教育であったり、あるいは美術館の機能であったりとか、そういったものを十和分館単体でやっていくのはなかなか非現実的である。四万十町全体としての美術品は持っているけれども、十和で美術館を建てるから美術品を買うかということそれはあり得ない。結果として、町の財産として持っている町立美術館の美術品を展示するとか。または文化的施設

で行おうとしている STEAM 教育を十和でもやってもらうとか。それを受け入れるスペースがあったりするのかなとか。文化的施設のようなものを作るにしても、実際に提供できるサービスであったりとか、学びであったりというのは、今進んでいる本館がそういった役割を担うのか。ある一定、文化的施設が進めようとしているサービスを受けられる体制を持った図書館機能がメインの分館があればいいというイメージ。その図書館機能の中にはもちろん地域史料の収集や保存といった地域のアーカイブ的なものを整理してストックして誰でも見れるようなものにするのが現状なのかと思う。

(村井洋平委員)

先ほど行ったワークショップ形式の協議の時に出たのが、図書館にコインランドリーがあったらいいとか。そういう突拍子のない発想でもいいのか。

(田頭誠志会長)

今はまだ計画段階なので、自由な発想で考えていただけたらと思う。実現するかどうかは別にしても、こういったものがあったら便利だなというのも意見として出ることもありがたい。

(大元政策監)

今、村井委員がおっしゃったことだが、文化的施設でありながら四万十町の図書館の本館を人あっているの、図書館の部分だけピックアップしていくと、やはり大正や十和に分館という機能があった方が、運営もしていきやすい。なので、十和において分館というものが何かという協議をしている訳だが、既存のものを使うのか、それとも施設を新しく作るかという議論はこの場で話すことができていたらいいと思う。先ほど話されたように、例えば建物を目的ごとにいろいろ作っていくとすると、それを管理していくコストというのはいろいろかかってくるので、今この際作るものがあるとするなら、もし、一緒にした方がいいというものがあればこの場で検討いただきたい。会長もおっしゃられたように自由な発想、制限なしで協議していただけたらと思う。

(伊賀守委員)

話は変わるが、ここはかつて開発センターだった。いろいろな機能を持った施設だったので、図書館分館も多くの機能を持ったものになればいい。ただ職員 3 人体制で状態を保っていけるかはまた別問題になってくる。

(田頭誠志会長)

十和の一つの拠点としての分館を作る。そのハード面をどうするのかというのはある程度具体的にしていないといけない。その時に例えば文化的施設が提供するサービスを受けられるスペースを入れ込んでおくといったことなんかは大事なことです。ただ、そのサービスを誰が企画・運営するかはまたソフト面のことで、それが職員 3 人で可能かどうかは別の部分で話すとして、先ほど冒頭で出たように図書館側から講師として依頼を受けたけれども、別の場所でやっていると。でも、図書館でやっていたら、図書のために訪れた人も興味を持つきっかけになる。予定していたことだけでなく、予想外のことが起こる可能性というのが、同じ場所で行うことで発生するのではないかと思います。コミュニティを重要視すると、本とコミュニケーションを取るというのは図書館では当然のことだが、ふらりと

立ち寄った観光客が、たまたま居合わせた方と知り合いになる。そういった環境を生むにはコミュニティスペースがないと成り立たない。あるいは、椅子を売ってるような体験活動があれば、それを目にするような環境がないと、そこに興味を生むきっかけは生まれない。どこまでハード面でできるかというのは予算との相談になってくるが、こういうスペースとかこういうところがあった方がいい。なぜなら、そこに観光客が来たりしたら四万十川を自慢できるとか状況も起こりうる。そういったイメージですはハード面、運営していくためのソフト面を考える。そういった意見をくださればありがたい。

(栗原あゆみ委員)

旧小鳩保育所を活動している中でよく言われるのが、子どもたちが集まって遊べる場所があればいいということ。今、子どもたちの流行りがカードゲームでお互いに持ち寄っては遊んだりしている。そういった場所が十和分館にもできればいいなと思う。

(鈴木幸代委員)

個人的に大正の図書館には読み聞かせで通っていて、リクエストをしては次の訪問日に受け取りに行くというようなサイクルができています。そういう中で分館が十和にできるのは、少しの移動時間ではあるが短縮されるというのはありがたいことだと思う。サテライトだとリクエストが来ることないのかと思うが、分館ができてこちらでもリクエストが可能になることもありがたい。ただ、仕事柄思うことが地域に住む高齢者のことで、実際身体が弱っている方も多い地域なので、分館や計画されている移動図書館車が来る場所に来られない方もいたりする現状にあるので、サポートなどでもできる施設になれば嬉しい。

(田頭誠志会長)

関係する機関は別だが、社会福祉協議会の方が大正・十和地域で先日から給配食サービスの拡充を始めている。例えば、十和地域だといのぼり荘に付随している機関が給配食をやっているが、そこが手の届かない家庭に社会福祉協議会が今回から給配食を始める。ただ、今希望者は少ないが、月～金まで対応し、昼のお弁当だけだが、二人の配送員がいて配達をしている。大正地域でも同様にやっていて、元々給配食サービスを行っていなかったもので、それなりニーズはあるとのこと。そういった活動を社会福祉協議会がやっているの、そちらに先ほどのような情報を提供してあげれば、サービスの検討がされるのではないと思う。

他に意見はないか。

(伊賀守委員)

前にも言ったが、コンビニとか食べるところが一緒になった施設ができたら一番いい。大道の人は降りてきたなら、本を読むだけではなく、せつかくなら他の目的も達成したい。そういった目的も同時に達成できるような環境ならありがたい。

(田頭誠志会長)

十和地域に分館ができるということは、そこが窓口となる。県立図書館のように全国の図書館とつ

ながる、蔵書につながる窓口がある一定近くにできるというのが一つの良さである。ただ、言われる
今後はできた時の運営とかの部分について、その周辺だけでなく十和地域全体を見てさらなる課題は
何かというのを検討していく。分館ができたら終わりではなく、そこをスタートとしていくのが重要
だと思う。そういった意見を話せる場であるので、次回以降も発言していただけたらと思う。

— 終了 —